

Fuji Learning Information No. 10

2017年3月15日

旭川藤女子高等学校

学び改革のスキルアップのために、校内外で様々な研修を積み重ねてきました。このたび、本校教員が奈良女子大附属小学校の「学習研究発表会」に参加してきました。「なぜ小学校の研修？」という疑問が湧いてくると思います。それは、本校の Fuji Learning の考え方に、この小学校で脈々と続く「奈良の学習法」の考え方が土台にあるからです。この学校は、以前にも紹介したことのある木下竹次が大正時代に主事をしていた学校です。今回の発表会にも全国各地から千人単位の教員が研修にやってきました。参加をした教員は、「是非、多くの教員が見に行ったらいい。独自学習を土台とした相互学習の生の姿が見られる！」と興奮気味に語っていました。

奈良の学習法

この小学校では、学習のことを「しごと」と呼び、人間としての結びつきを育てる体験活動を「けいこ」とよび、様々な行事を「なかよし」と称しています。小学校らしい表現だなと思うと同時に、子どもたちを育てる思いが込められた言葉に聞こえます。

さて、奈良の学習法のポイントの一つは生活と学習の一体化です。学校活動や学習活動のすべてが連動することで力をつけるという理念をもっています。それを具現化するために、「朝の元気調べ」、「毎日の日記指導」、「自由研究発表」、「授業進行役を子供にゆだねる」などの取り組みがあります。

朝の会で全員の子供に発表の機会を与える「朝の元気調べ」では、「元気です。」「朝から熱があって頭が痛いです。」「お大事に！」などの声が響き渡ります。また、皆に紹介したいことを話す機会にもなります。継続することで表現力の向上や発表の楽しさを味わうことが意図されています。また、子どもたちは褒めることで発表を楽しみにして準備をするようになるようです。質問をすることを「おたずね」と称していますが、これも子どもの成長に大事な役割を果たしているようです。

また、「毎日の日記」が継続されています。継続することで書く力に繋がります。担任は褒め言葉を朱書きしてその日のうちに返します。さらに「自由研究発表」も行われており、問題を追究する力、まとめる力、わかりやすく発表し「おこたえ」する力を養う機会となっています。

さらに注目すべきは、「子どもが進める授業」です。「朝の会」、「学級会」、「通常授業」などあらゆる場面で進行役を子供に委ねています。子ども自身で学習を進めて行く力をつけるために、このような場面を設けていると言えます。

また、普段の「学習の時間」は、「独自学習」⇒「相互学習」⇒「独自学習」という展開がされています。木下竹次は、「相互学習をするために独自学習がある」と述べており、家庭での独自学習を踏まえ、学校での相互学習を重視し、さらに課題を学習者自身が自分のものとして捉え直し「個」を鍛えていくために、再独自学習を位置づけました。このような理念が、実際の授業で具体化されているのです。子どもたちは、学習は教えられるものではなく自分でするものという意識が定着しているので、「独自学習」という言葉が自然と出てきたり、先生が説明する場面があると「先生が教えた！」という言葉が発するぐらい、学習とは何か？の捉え方は定着しているようです。

小学校の先生達の鼎談より

視察報告を聞いた教員から出てきた疑問に答える糸口が、小学校の教員の鼎談の中から見えてきます。多くの教員が抱く疑問は、「どのようにすれば子ども主体の活動が徹底できるのか?」「アクティブラーニングをどう捉えているのか?」などです。

- 職員室にソファがあり、先生たちが日常的に雑談をしている。その中から、見えてくるものがある。コーヒーポットがあり、窓からグラウンドが見える。
- 深い学びの過程として奈良では、独自⇒相互⇒独自を徹底している。独自学習だからと放ったらかしにしておくわけではない。独自に自分の考え方をもちょうに仕向ける仕組みである。
- 教えない。前に出ない意味がわかるとすごい!待てるどころと、待てないところ、出すぎないけど刺激を与える。教師の「出」のタイミングが大切。
- アクティブだから何か活動しなくてはならないというわけではない。個の力を高めることがアクティブラーニングの役割。アクティブラーニングは数学には向かないと言われるが・・・、1時間ノートに向き合っ、休み時間に表に出ない子も脳が動いている。
- 合理的でなくても、遠回りでも、子どもが考え気づく、全員が出来なくてもよい。子どもが追求したら、認める度量も必要。

これらをみると、子どもたちが育つには何が必要かということにポイントが置かれ、先生たちは常に思索し、研鑽し続けている様子が伺えます。また、今回の研究会でも主題の中に「アクティブラーニング」という言葉が使われているものの、あえてアクティブラーニングを創り上げる必要はなく、「奈良の学習法」そのものがアクティブラーニングだと普通に捉えているように感じます。

藤の学び改革=Fuji Learning のルーツは奈良にあり

奈良女子大学附属小学校の「奈良の学習法」は、「子ども主体の活動」という教育に対する理念をはっきりともった実践者が、学校全体の継続的な取り組みにより伝統的に引き継がれており、子ども自身が伸びる教育が効果的に行われていることが見えてきます。学習歌「伸びてゆく」がそれを表現していると言えます。

- | | |
|----------|------------|
| 一 山のわらび | 二 たんぼの 麦の芽 |
| ぐんぐん のびる | ぐんぐん のびる |
| 春の日を あびて | 雪の中を 分けて |
| ひとりで 伸びる | ひとりで 伸びる |

本校で取り組んでいる Fuji Learning には、生徒の主体的な取り組みや個々の学力を伸ばさせる仕掛けが組み込まれています。「奈良の学習法」を知るにつけ、生徒を育てる理念の共有や「日常的な指導」、「指導の技」の共有など、まだまだ教員が学んで議論をしなければならないことが多いと痛感させられます。



伝統は、変えない。
勉強を、変える。

藤の学び改革